

# 第7回イスタンブール ビエンナーレ

「エゴフーガル——自我(エゴ)からの逃走・次なる創発(現れ)にむけて」

7th International Istanbul Biennial

Egofugal——Fugue from Ego for the Next Emergence

# BT

1 Monthly  
Art Magazine  
Bijutsu Techno  
Vol. 54 No. 814  
January 2002

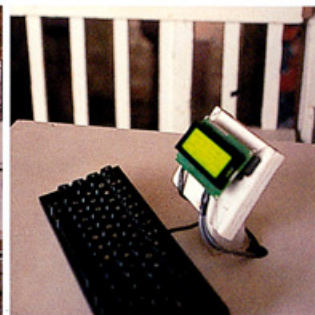
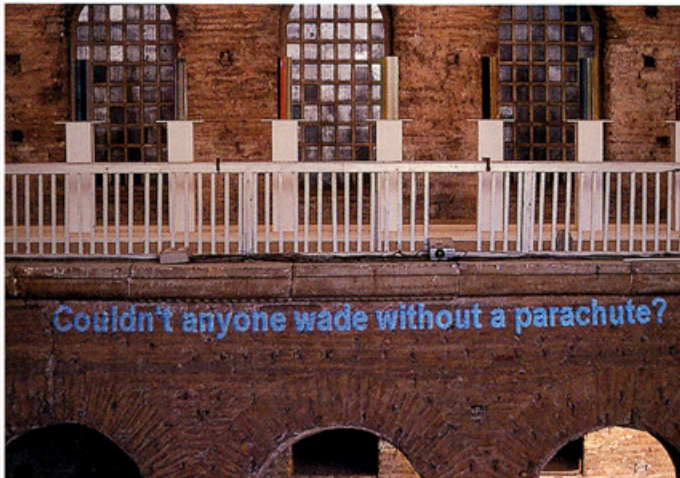
http://www.bijutsu.co.jp

の作品を集め、ボスボラス海峡をはさみユーラシアの両側で展開した。美術展のテーマとしては大胆奇抜なその提言は、多くのキュレーター、批評家、アーティストを驚かせた。的確で学術的な展覧会のための論文であるだけでなく、長谷川のテキストはキュレーターとしての視点を表現したマニフェストであると同時に、図らずも九月十一日(世界貿易センター爆破の旦)以後の時代の気分を鋭く捉えたものとなった。

……自我から離れて逃げるように周囲に拡散していく存在のあり方とはなんだろうか。仏教的な無我とも、宗教的な献身、自己犠牲とも異なる。アジア的な集団主義ともむろん異なる。これは個人的なものと集合的なものととの全く新たな関係を提案する言葉なのである。個の多様性を維持しながら、他者と外部と意識の磁場をシェアしつづけ、マクロな秩序の形成にいたろうとする積極的で知的な態度である。意識、情報——そして、空間でなく、時間とスピードのなかに生きる生産者たちによって共有されるメタフィジカルな場の物語なのである。それは自己と他者、個と集合との関係、個体と場との関係の新たなモデル概念となる。……

(長谷川祐子 第七回イスタンブール・ビエンナーレ展覧会)

30—Rafael Lozano-Hemmer ながら質問を打ち込むと、それをもとに新たな質問をランダムに生み出すというコンピュータ・プログラムを考案したのは、ラファエル・ロザノ・ヘメル(1967メキシコ生、在スペイン)。(1分間で33個の質問、相関的構造 No.5) (2000 - 2001)は、答える余裕がないほどの速さで、会場壁面やあちこちに設置されたLCDに問いかけが表示される。115ページに作家のコメントあり



30

カテゴリーより

選ばれた作品は多分野にわたり、しかも長谷川  
の概念構造に沿って、注意深く表現されていた。  
テクノロジーの分野ではマシュー・ブリアン、イ  
ーブル、デヴィッド・スーナン&サイモン・トレ  
ヴァックス。伝統的分野では、コートジボアール  
のフレデリック・ブルリー・ブアブレ、台湾のド  
ウ・ウェン・シグ、日本の永田宙樹<sup>（おとむら）</sup>。建築とデザ  
インからは、マイケル・エルムグリーン&インガ  
ー・ドラグセット、SANA A、ミカ・ターニラ&  
マッティ・スーロネン、アナ・マリア・タヴァレス。  
自然をテーマにした、レイチェル・パーウィック、  
シモーネ・ベルティ、アニャ・ガラッチオ、クリ  
ス・バーデン。関係論では、リジア・クラーク、フ  
ランシス・アリス、カンバラツチエコレクティブ、  
フセイン・チャラヤン、リクリット・ティラヴァニ  
ヤ。フィクションとテクノロジーを組み合わせた  
存在論として、ドミニク・ゴンザレス・フェル  
テル、ピエール・ユイグ、フィリップ・パレーノ。  
そして、最終的に、長谷川の展覧会は現代美術  
にとってもっとも緊急性を有したテーマである、  
ライフ生命そのものを論じたのである。好むと好  
まざるとにかかわらず、長谷川はこの展覧会が遍  
在する時代に稀有なものを示した。それは精密で